



丁寧に営まれていた日常

2007年から継続して広島の遺品を撮影している写真家石内都さん。その写真にふれたノンフィクション作家^{かけはし}梯久美子さんがとても素晴らしい文章を書いている。引用する。

＊

広島で被爆した人たちが身につけていたものを石内都氏は撮影している。靴や眼鏡などもあるが、ほとんどが衣服で、若い女性のものが多い。

驚いたのは、その服たちの美しさである。花柄のスカート、白い衿のついたギンガムチェックのワンピース、水玉のブラウス…。いま着てもじゅうぶんお洒落に見えるデザインだ。汚れ、焼けこげ、シミがついているが、それでも服たちの美しさは損なわれていない。こんな洒落た服を、当時の広島的女性たちが着ていたことがまず驚きだった。

もうひとつの驚きは、写真そのものが美しかったことだ。写真はすべてカラーで、明るい光の下で撮影されている。これまで広島の遺品といえば陰影を強調したモノクロと相場が決まっていた。原爆の悲惨さを伝える目的のために撮られてきたからだ。けれども石内氏の写真からは「美しく撮る」という明確な意志が感じられた。

衝撃を受けた私は石内氏に会いに行き、「原爆の遺品をあんなふうに美しく撮るのは勇気が要ったのではないですか」と訊いた。あの美しさはタブー破りだと思ったからだ。彼女は「うん、ぜんぜん」と首を振った。

「だってあの服たちは、女の子たちが着ていたときはもっともっときれいだったのよ。

それをきれいに撮ってなぜいけないの」

私ははっとした。自分がいままで戦争の遺品を、歴史史料として、あるいは自分がものを書くときの資料としてしか見ていなかったことに気づかされたのだった。

残酷な歴史を物語る陰影がいったん消され、服が本来持っていた美しさがよみがえったとき、それらを着ていた人たちの気配が、歴史の闇の中から立ち上がってくる。そのとき初めて、彼女たちが悲惨な死を死んだという事実だけでなく、死の瞬間まで丁寧に営まれていた日常があったことが、実感をもって伝わってきたのである。

ところで昭和二〇年の八月六日の広島で、あんなにきれいな服を着ていた女の人たちがいたのはなぜか。そんなことが許されたのか。当時はみな、もんぺをはいていたのではなかったかー。

石内氏の写真展の図録に掲載されていた解説文によれば、もんぺの下にひそかに身につけていたのだという。この話にも衝撃を受けた。意外だったからではない。よくわかるからこそ衝撃的だった。生命の危険にさらされた戦時下でも、彼女たちはお洒落がしたかったのだ。誰に見せるためでもなく、自分自身のために。

このことを、大学生を対象とした講演で話したとき、女子学生たちが一瞬息を呑む気配がした。涙ぐむ子、大きく頷く子。きっと私が感じたのと同じ気持ちだったのだろう。死んでしまった女の子たちと自分が一気につながったのだ。 (『學士會会報』2012-V)